

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

就活している学生が「これからは最も重視されるのはコミュニケーション能力だそうです」と言うので、「うん、そうだね」と頷きながらも、この子は「コミュニケーション能力」ということの意味をどう考えているのかなど、ちょっと不安になってきました。きっとこの学生は、「自分の意見をはっきり言う」とか「目をきらきらさせて人の話を聞く」とか、そういう事態をぼんやり想像しているのだろうと思います。もちろん、それで間違っているわけではありません。でも、^Cどうしたら「^①そういうこと」が可能になるかについては、いささか込み入った話になります。例えば、どれほど「はっきり」発語しても、まったく言葉が人に伝わらないときがあります。個人的な話をします。

何年か前にフランスの大都市に仕事でしばらく滞在したときの話です。スーパーに行ってマグカップを買おうと、レジに行ったらレジの女性店員に何か訊ねられました。^②なんとなく聞き覚えのある単語なのですが、意味がわかりません。

「え？ 何ですか？」と聞き返してみたが、それでもわからない。二度三度と「え？」を繰り返しているうちに店員は諦めたらしく、肩をそびやかにしてマグカップを包み始めました。どうも気持ちが片づかないので、カップを手渡されたあとに、レジの上に身を乗り出して、ひとことひとことゆっくり噛みしめるように、「先ほど、僕に何を訊いたのですか？」と問いかけました。すると店員もゆっくり噛みしめるように、「郵便番号を訊いたのだ」と答えた。「なぜ、郵便番号を？」と重ねて訊くと、「どの地域の人かどんな商品を買っているのか、データを取っているのだ」と教えてくれた。

郵便番号(Code Postal)というのは基本的な生活単語です。もちろん僕も知っていました。でも、それがスーパーのレジでマグカップを買うときに訊かれると、聞き取ることができない。ふつうレジで訊かれるはずの質問リストの中に、その単語が存在しないからです。

^(注1)これはコミュニケーション不調の典型的な一例です。一方において意味が熟知されたこと、当然相手も理解してよいはずのことを口跡明瞭に発語しても、相手が聞き取ってくれないことがある。文脈が見えないからです。「スーパーのレジでは買物に際して顧客情報を取ることがある」という商習慣を知っていれば、文脈がわかる。知らなければ、わからない。

このときに肩をすくめた女性店員に向かって、僕がレジに身を乗り出して、ひとことひとこと区切って発語したことで、意味のわからない単語の意味が明かされました。これが「コミュニケーション能力」です。そういうことを顧客はふつう、レジのカウンターではしないからです。

店員は僕がフランスの商習慣になじみのない外国人であることをサッチして、なぜマグカップを買うのに郵便番号を訊くのか、その理由を教えてくださいました。そういうことはふつうレジのカウンターで店員はしてくれませんが(うるさそうに肩をすくめて「バカか、こいつ」という顔をしておしまい)。僕は、彼女が僕のためにこの説明の労を取ってくれたことを多とします。これは彼女の側の「コミュニケーション能力」です。

つまり、コミュニケーション能力とは、コミュニケーションを円滑に進める力ではなく、コミュニケーションが不調に陥ったときに、そこから抜け出すための能力だということです。

今の例でおわかり頂けるように、それは「ふつうはしないことを、あえてする」というかたちで発動します。買い物客はふつうレジに身を乗り出して、店員の発言を確認しません。^Iレジの女性店員たちはふつう、フランスのローカルな商習慣を外国人に説明しません。僕たちは二人ともそれぞれが「ふつうはしないこと」をした。それによって一度途絶したコミュニケーションの回路は回復しました。こういうのがコミュニケーション能力の一つの発現形態だと、僕は思います。

「ふつうはしないこと」は、「ふつうはしないこと」という定義から明らかかなように、マニュアル化することができません。それは^③に、即興で、その場の特殊事情を勘案して、自己責任で、^(注3)適宜コードを破ることだからです。コードを破る仕方はコード化できない。当たり前です。

同じような例をもう一つ。これもスーパーで買物をしたときの話(今度は日本で)。スーパーのレジというのは、どうもコミュニケーション不調のタハツ地点のようです。^d

夕食の材料を買い込んでお金を払おうとすると、若い男の店員に「ホレーザ、ゴリヨスカ」と言われました。意味がわからないので、「え？」と聞き返しました。店員は同じ言葉を同じ口調で繰り返しました。三度目に聞いたとき、それが「保冷剤、ご利用ですか？」だということがわか

りました。

同じような「聞き取りそこね」は、日々タハツしていると思います。でも、^Ⅲ考えてみれば、このコミュニケーション不調は、客に聞き返されたときに、例えば「イタミややすい食材を冷やすために、保冷剤をお入れしますか?」^eと言ひ換えれば済むことです。「冷やす」という語が先に来れば、彼の滑舌の悪い「ホレーザ」が「保冷剤」であることは、おおかたの日本人にはわかります。

その手間を惜しんだところに、彼のコミュニケーション能力の低さが露呈^{ろてい}しています。

でも、これは彼の個人的な資質問題には帰すことができません。というのは、そのような「言い換え」を必要に応じて店員が自己責任で行うことを、^④日本の企業は好まないからです。管理部門は、フロントラインの人間が自己裁量で「マニュアルにあること以外の言葉」を口にするのを嫌います。そんなことをされたら、現場の秩序が乱れ、指揮系統が混乱すると思っています。こういう店の接客マニュアルを起案する管理職の人たちは、顧客と店員の間で取り交わされる対話はすべて予見可能でなければならず、店員はそこに指示された以外の言葉を口にしてはならないと信じています。^Ⅳ

これは、現代社会に取り憑いた「コミュニケーション失調」のテンケイ的な病態です。どうコミュニケーションすべきかについて事細かなルールや教訓があるのに、一度不調に陥ったコミュニケーションをどうやって再開させるかについての経験知はひと言も語られない。

それは、^⑤コミュニケーション能力というのが、「適宜ルールを破る」ことだからです。「ふつうはしないことをする」ことだからです。管理者たちはそれを恐れるあまり、「ルールが破られるくらいなら、コミュニケーションなんか成立しなくてもいい」という判断に与^{くみ}ってしまう。ほんとうにそうなのです。

(内田樹『街場の共同体論』より)

(注1) □跡…もの言い方。 (注2) 多とする…高く評価する。

(注3) コード…規則。 (注4) 与する…同意する。

問一 二重傍線部 a～e について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 波線部 A～E の語の品詞名を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度使ってもよい。)

ア 名詞 イ 副詞 ウ 連体詞 エ 動詞 オ 形容詞
カ 形容動詞 キ 接続詞 ク 感動詞 ケ 助詞 コ 助動詞

問三 波線部 I～IV の動詞の活用の種類として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度使ってもよい。)

ア 五段活用 イ 上一段活用 ウ 下一段活用 エ カ行変格活用 オ サ行変格活用

問四 傍線部①「そういうこと」とは、どういうことか。「～こと」に続く形で本文中から二箇所抜き出して答えなさい。

問五 傍線部②「なんとなく聞き覚えのある単語なのですが、意味がわからない」とあるが、それはどうしてか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レジで訊かれる質問リストを知らなかったから。
イ 郵便番号という単語はふつうレジでは訊かれることがない単語だから。
ウ 郵便番号という単語は日常生活では使われないことがない単語だから。
エ フランス語の郵便番号という単語は日本人には聞き取りにくいから。

問六 本文中の □ に入る適当な四字熟語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 用意周到 イ 勇猛果敢 ウ 正確無比 エ 臨機応変

問七 傍線部③「その場の特殊事情」とあるが、この場合の「特殊事情」が述べられている部分を二十五字以内で抜き出して答えなさい。(句読点も字数に含む)

問八 傍線部④「日本の企業は好まない」とあるが、それはどうしてか。「～から」に続く形で二十字以内で抜き出して答えなさい。(句読点も字数に含む)

問九 傍線部⑤「コミュニケーション能力というのが、『適宜ルールを破る』ことだからです」とあるが、筆者がそのように述べるのはどうしてか。五十字以内で説明しなさい。(句読点も字数に含む)

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

来年三月に廃校する高校の野球部。中学から一緒に野球をやってきた安高彰浩、布施信吾、稻生有一の三人は、最後の学年の部員として毎日三人で練習を続けていた。

「よし、有一、ええぞ」

マウンドで有一がわずかに頷いた。きれいなオーバースローのフォームから球が放たれる。ミットに重い手応えがくる。

有一はなぜ……と、球を受ける度に思ってしまう。

有一はなぜ、他の高校に行かなかったのだろうか。

この一球であれば、この一球を鍛え磨けば、甲子園は射程内ではなかったのか。有一の抱えている事情はいまだに、よく知らない。けれど、稲生の家自体は旧家でかなりの資産家でもあった。田舎の中学校とはいえ、有一のセイセキも学年トップに近かった。彰浩たちとは違い、望めば都市部の私立校でも入れる立場だったはずだ。

「そりゃあ、ユウみたいにしやべらんかったら面接で、落とされるやないか」と、信吾はことなげに言うけれど、彰浩はそうは思わなかった。寡黙であっても、それは投手としての有一の力を損なうものではない。実際に有一の球を受けてみれば、わかる。この球なら、甲子園の常連校でも通用するだろう。有一さえその気なら、甲子園のマウンドはまんざら夢ではなかったのと思う。「おまえ、なんで地元に残ったんじゃ」高校に入学してすぐ、尋ねたことがある。有一は他人事のように首を傾げ、曖昧に笑っただけだった。

「うっへえ、行くぞーっどどーん」

奇妙な叫び声をあげて、信吾がホームベースめがけて滑り込んでくる。彰浩は、有一の一球を銜えこんだミットで信吾の頭を思いっきり叩いた。

「アウト！」

信吾が頭を抱えて、転がる。そのままうつ伏せになった。

「くっそう。悔しいよう」

こぶしで地を叩く。

「悔しかったら、もうちょいまともなスライディングせえや」

もう一度軽く、今度は尻のあたりを叩く。

「ほら、もう一度やってみいや。ダイヤモンド一周、華麗なる本塁突入のスライディング」

「うへへっいっ」

奇声を発し、信吾は起き上がり、そのまま大きく伸びをした。

「悪いけど、おれ、そろそろ帰るわ」

日はまだ中天にある。彰浩はわずかに目を細めてみた。

「どうした？ 何かあったんか？」

「別に。三年やし、ちっとは勉強しよかて思うてな」

「は？ ふざけんや。おまえが勉強するなら、うちのアニメだって問題集を広げてるぞ」

「おいおい、猫と一緒にかよ。しかも、でぶでぶのばあさん猫だぜ。悲し過ぎて涙も出んわ。まっ、ともかく今日はここまでにするってことで。じゃあな」

ひらりと手を振って、信吾は駆け出した。

「おい、信吾、待てよ」

声をかけたけれど振り向かなかった。一定のリズムで走り、駐輪場の陰に消えて行く。

三人しかいないのだから、野球の練習と呼べるものなどできはしない。それでも、午前中に集まり、二時間近く走って、投げて、バットを振って、汗を流す。それが緩やかな決まり事となっていた。

彰浩も、有一も、信吾も、個々の思いや事情を抱いて、諦めたものも捨てざるをえなかったものも数多ある。それでも、ギリギリ自分たちなりの野球をしようという暗黙の了解が存在していたし、了解のもとに、今日も集まっていたのだ。

練習を切り上げるには、一時間以上早過ぎる。

「なんだ、あいつ」

舌打ちしてみる。

「信吾……病院じゃないか……」

マウンドから降りてきた有一が呟いた。ため息みたいな小さな声だった。有一の声はすぐに紛れる。風や物音や他人の声に紛れ、切れ切れになり、消えてしまう。どこか儂い印象は、まだ有一に纏わり付いていた。しかし、今の声ははっきりと彰浩の耳に届いた。

「病院？」

「うん……おふくろさんが入院したって……」

「え？ ほんまか？」

「たぶん……ばあちゃんが、そう言うてたから……」

布施と稻生の家は、近い。有一が転校してきたとき、稻生の祖母がわざわざ信吾のもとに向き、仲良くしてやってくれと頭を下げたのだと、後になって彰浩は耳にした。旧家の末裔らしく、どこか権高なフンイキもある老女に深々と低頭されて、信吾は少なからず戸惑ったらしい。ただ、有一を野球部に誘ったのは、義理や義務感からではなく、有一の一球に信吾なりに魅せられたからだ。これもずっと後になって、耳にしたことだ。「おふくろさんが入院て、そしたら、今、一人か……」

信吾は、早くに父親が亡くなり母親と二人暮らしのはずだ。

信吾の姿が消えた駐輪場に視線を巡らす。そこは、ただひっそりと暗い場所で、彰浩の目には淡い闇以外、何も捉えられなかった。

その夜、警察から電話があったのは十時近かった。テレビを見ていた。今日から甲子園では選抜大会が始まっていたのだ。今年のヒット曲を行進用にアレンジした軽快な音楽が響き、選手たちが誇らしげでもあり、どこかぎこちなさも感じる表情で歩いている。その姿を見るときもなしに見ていた。本当は見たくなかった。父が熱心にテレビ画面を見詰めていなければ、すぐにでも消していただろう。そこまでしなくても、立ち上がりさっさと自室にこもればいいのだ。

なのに、彰浩は視野の片隅にテレビ画面を、聴覚の一部で選手宣誓やスタンドのどよめきをしっかりと捉えていた。それらを振り切つてしかめ面のまま居間を出て行くことに少し抵抗があった。どうにもならないことに拘って、こそこそ逃げ出そうとする自分が卑小で哀れな者に見える。自分で自分を哀れみそうで、怖い。

しかし、それでも、やはり、拘ってしまう。

自分には決して手の届かない場所を堂々と歩いているのは同年代の少年たちだ。力及ばず届かなかったのならまだしも、挑むことさえ許されなかった。同じ国に生まれ、同じ年齢でありながら、自分と彼らの間には無限にも思える隔たりがある。

「ほんま、やなあ」

ほろりと言葉が零れた。父がテレビの前から振り返り、なんだ？ と問う代わりに、瞬きをする。画面が変わり、女子ゴルファーの顔が大きく映し出されたのを潮に彰浩は腰をあげた。老猫のアニメが遠慮のない欠伸を漏らす。電話が鳴ったのはそのときだ。由美子が出た。

「はい、もしもし、安高ですが……は？ 警察？」

由美子の横顔から血の気が引いていくのが、はっきりと見て取れた。父も腰を浮かす。二人の兄のどちらかに何事かが起こったのかと、彰浩は

大きく息を吸い込んだ。別に運命論者ではないけれど、不運とか不幸とかいうやつは群れて来るような気がしてならない。水の流れに似て低いところに集まってくる。これでもか、これでもかというぐらい。

「え？ まあ……信吾ちゃんが」

由美子の丸い身体が、わずかに前に屈かがみこむ。

信吾？

「はい……はい……わかりました。すぐに……はい三、四十分ほどで、伺えますので……はい、あの、信吾ちゃんの様子は……ああ、そうですか、はい、では、すぐに」

「信吾がどないしたって？」

由美子が受話器を置くより早く、尋ねていた。口の中が妙に乾く。

「信吾に、何かあったんか？」

「うん、どうも……警察に捕まったみたいや」

「は？ まさか。何で……」

「よう、わからんけど。江草で喧嘩けんかしたとか」

江草は、西隣に位置する市だった。四十キロほど離れている。人口数万の小都市だが、近隣では唯一の市だ。入院設備のある総合病院もいくつかある。信吾の母の入院先もたぶん、江草なのだろう。そこまでは、わかる。けれど、そこから先は不明だった。信吾は陽気で調子に乗りやすい性格ではあるけれど、短気でも粗暴でもない。暴力に対して、臆病なところさえあった。不慮の事故に遭ったというならまだしも、喧嘩とは……。

「どういふことなんだよ」

苛立いらだちがこみあげる。父が立ち上がった。

「ともかく、迎えに行かんとかかんじやろ」

落ち着けという眼つきで、彰浩を見やる。

「信吾が迎えに来てくれて、言うてるわけやろが」

「そう。布施さん入院しとるしね、うちしか頼るとこ、なかったんやないんかな」

「ほな、早うに行つてやらんと。車のキー、出せや」

「あんたは行かんですよ。うちと彰浩で行きます」

「なんでや？」

「呑のんでるやないの。そんなんで警察に迎えに行ったら、あんたの方が捕まるでしょうが。うちが行くから、あんたは後片付けしといて。ちゃんと鍋まで洗うてな」

エプロンを脱ぎ捨てると由美子は、壁にかかったキーホルダーに手を伸ばした。

由美子の運転する軽自動車の後部座席で信吾が小さく呻うぶいた。

「痛いかな？」

尋ねた彰浩に、信吾は黙ってかぶりを振った。唇と目の下が、それとわかるほど腫はれている。

「まあ喧嘩といっても、多勢Bに無勢というか、向こうは五人もいたわけやし、大人やし、布施くんは一人やしね。どっちかというと被害者みたいなところもあるから……けど、目撃者の話だと、先に手を出したのは布施くんらしいし、本人も認めているから、何にも無しで帰っていいよってわけには、いかんかってねえ」

いかにも温厚そうな中年の警察官は、ひたすら頭を下げる由美子を前にして、猫背の姿勢をさらに丸くしていた。

「はっきりとは言われなかったけど、学校へもナイショにしといてくれるみたいやで。大事にならんでよかったやないの」

由美子の声が車内に響く。信吾の隣で彰浩は、眉をひそめた。

「母さん、声が大きすぎ」

「あっそう。ごめんな、地声なもんやから」

「すみません」

口の中に負ったきずのせいばかりではないだろう、信吾がぐもった声で詫びを言う。詫びなんていらぬ。聞きたいことは他にある。

「おまえ、何で喧嘩なんかしたんや？」

「うん……」

信吾はうんと言ったきり、黙り込んだ。

「言いつないなら、ええけどな」

「あ……いや、道を歩いてたら向こうから、おっさん連中が来て……肩がぶつかったんや」

「うん、警察で聞いた。草野球のチームのおっさんたちやったんやろが。何か、試合の後で一杯やって酔っ払ってたって。向こうがよろけて、ぶつかってきたんやろ」

「まあ、酒臭かったけど……ぶつかったやつが、舌打ちして『気をつける。イモが』って言うたんや、それで……」

「それだけか？」

信じられなかった。『気をつける。イモが』という言葉は粗野でもあるし、侮蔑的でもある。ある者にとっては充分に喧嘩の因になりうるかもしれない。しかし、信吾がその一言だけで激昂したとは、とても思えなかった。信じられない。彰浩の視線を受け止めて、信吾が身じろぎする。

「電気店の前だったんや」

「え？」

「電気店の前で、テレビに甲子園が映ってた。今日、選抜やろ……別に、どうってことないけど……別にどうってことないのに、何か急にいらついで……そこに、ぶつかってこられて……」

信吾が口をつぐむ。由美子が大きく息を吐いた。彰浩は座席に深く座り直し、こぶしを握った。存分に明るい陽光の下を誇らしげに歩くユニフォームの群が浮かぶ。光は眩しく、空気はヤクドウしていた。

挑むことさえ、許されなかった。

「信吾」

いつもよりゆっくりと丁寧^zに名前を呼んでみる。

「うん？」

「明日も練習、出てくれるか？」

返事の代わりに不鮮明な呻きが返ってきた。車が揺れ始める。山越えの道に入り、舗装が疎かになっているのだ。小刻みな振動に身体をゆだね、彰浩はもう一度強く、こぶしを握り締めた。

(あ)そのあついで『晩夏のプレイボール』より

(注) 権高…気位が高く、傲慢なこと。

問一 二重傍線部 a～e について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 波線部 x 「はつきりと」・z 「丁寧に」が修飾している語句をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

x 「はつきりと」

ア 今の声は イ 彰浩の ウ 耳に エ 届いた

z 「丁寧に」

ア いつもより イ ゆっくりと ウ 名前を エ 呼んでみる

問三 波線部 y 「自分と彼らの間には無限にも思える隔たりがある」はいくつの文節に区切れるか。漢数字で答えなさい。

問四 傍線部 A 「こともなげに」・B 「多勢に無勢」・C 「激昂した」の本文中における意味として適当なものをそれぞれの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 「こともなげに」

ア 不機嫌な様子でぶっきらぼうに イ 何事もないかのように平然と

ウ 嬉しいことを自慢するように エ 何も興味がなさそうに

B 「多勢に無勢」

ア 多人数を前に最初からあきらめること イ 多人数の方が勝つと決まっていること

ウ 多人数の側と少人数の側ということ エ 多人数に対して少人数のため勝ち目がないこと

C 「激昂した」

ア 相手を打ち負かそうとした イ これまでにない怒りを感じた

ウ 怒って激しく興奮した エ 状況が判断できなくなった

問五 傍線部①「彰浩はわずかに目を細めてみた」とあるが、「彰浩」が「目を細め」たのはどうしてか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信吾の言葉を聞いて、信吾にはやる気がないのでないかと思ったから。

イ 信吾の言葉を聞いて、その言葉に込められた気持ちを知りたいと思ったから。

ウ 信吾の言葉を聞いて、今日も早く帰ろうとしたことに不信感を感じたから。

エ 信吾の言葉を聞いて、帰るのにはまだ早いのではないかと思ったから。

問六 傍線部②「そこは、ただひっそりと暗い場所で、彰浩の目には淡い闇以外、何も捉えられなかった」とあるが、この部分から読み取れる

「彰浩」の心情はどのようなものか。心情を説明したのとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が何をすれば信吾が練習に帰ってきてくれるだろうかと考えを巡らせている。

イ 信吾の心細さや置かれた状況の厳しさを想像して、それ以上何も考えられなくなっている。

ウ 母親が入院したことを信吾自身から言ってもらえなかったことに対して、不満を感じている。

エ 信吾の母親が入院したことも知らずに、厳しい態度をとってしまったことを後悔している。

問七 本文中の□に入る適当な語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大事なのは力 イ 悲しい思い出 ウ 恵まれた時代 エ 実力社会 オ 格差社会

問八 次の一文は本文中のどこに入れるのが適当か。直前の七字を抜き出して答えなさい。(句読点も字数に含む)

たとえスポーツニュースの中のほんの短い時間であっても見たくない。

問九 傍線部③「こぶしを握った」とあるが、「彰浩」がこのような行動をとったのはどうしてか。四十字以内で説明しなさい。

(句読点も字数に含む)

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合で原文を一部改変したところがある。

或人、清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」と言ひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはの(注1) a (注2) (注3) (注4) A

たまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほ言ひやまざりけるを、度々問はれて、うち腹たちて、「やや、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬ(注5) B (注6) C (注7) D

るなりと申せば、養ひ君の、比叡山に兎にておはしますが、ただ今もや鼻ひ給はんと思へば、かく申すぞかし」と言ひけり。有り難き志なり

けんかし。

〔徒然草〕より

(注1) 清水…今の京都市東山区にある清水寺。

(注2) 行きつれたり…道で一緒になる。

(注3) くさめくさめ…くしゃみが出たときにしたまじないの言葉。

(注4) 尼御前…尼になった高貴な女性に対して言う語。

(注5) 鼻ひたる…くしゃみをする。

(注6) 養ひ君…「老いたる尼」が育てていた子ども。

問一 二重傍線部 a 「まゐり」、b 「問はれ」を現代仮名遣い(全てひらがな)に直しなさい。

問二 傍線部 A～Dの本文中における意味として適当なものをそれぞれの選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 「何事をかくはのたまふぞ」

ア 何事をそんなにおっしゃるのですか イ 何事が起こったのですか

ウ 何事を書くのですか エ 何事をおっしゃりたいのですか

B 「いらへもせず」

ア 気付きもせず イ さわろうともせず

ウ 答えも知らず エ 答えもせず

C 「おはしますか」

ア いらっしゃるが イ いらっしゃる方が

ウ いらっしゃったが エ おっしゃったが

D 「有り難き」

ア 有り難い イ すばらしい

ウ めったにない エ 理解し難い

問三 傍線部①「問ひけれども」・②「うち腹たちて」の主語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 或人 イ 老いたる尼 ウ 兎 エ 作者

問四 本文中で「老いたる尼」が「くさめくさめ」と言い続けているのはどうしてか。そのことについて説明した次の文の空欄に該当する形で十五字以内で答えなさい。

このようにまじないをしなければ、と知っているから。

問五 本文の出典は『徒然草』であるが、その作者名として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 清少納言 イ 紫式部 ウ 鴨長明 エ 兼好法師